

松山鏡

ワキ 父

姫 その娘

ツレ その母

シテ 俱生神

地は 越後

季は 雑

「是は越後の国松の山家に住居する者にて候。さても某久しく添ひ馴れし妻におくれ。昨日今日とは存じ候へども。はや三年になりて候。又忘形見に姫を一人持ちて候ふが。あまりに母が事を歎き候ふ程に。対の屋を作り傍に置きて候。又今日は彼が母の命日にて候ふ程に。持仏堂に立ち出で。焼香せばやと思ひ候。

「雲となり雨となり。陽台の時とゞめがたく。花と

散り雪と消え。金谷の春ゆくへもなし。月日の道に閑守なければ。母御に離れて今年ははや。既に三年の其日なり。

「あら無慙や。何事やらん姫が独言を申し候。いかに姫が有るか。父が来りたるぞ。持仏堂をあけ候へ。あら不思議や。何やらん物を立ち隠すやうに候。如何に姫。さても汝が母におくれし時。元結切り遁世せばやと存じ候ひつれども。一族ども

の諫めにより。今まで浮世の住居たり。汝男子
ならば父と一所に有るべけれども。女子なれば対
の屋を作り置くなり。それに父が来りて姫よと呼
ば。さも嬉しげにて立ち迎ふべきにさはなくし
て。何やらん物を立ち隠すけしきの見えて候。さ
ては人の申すも誠に候ひけるぞや。実に汝は今
の母を木像に作り。明暮呪咀するといふは誠か。
何とて左様にあさましき心をば持ちて有るぞ。母

を恋しく思は。経念仏し弔ひてこそ。死したる
母も成仏し。おことも同じ蓮の縁となるべきにさ
はなくして。さやうに恐ろしき事をたくまば。正
しく浮ぶべき母も奈落に沈み。おことも同じ罪に
沈むべき事のあさましさよ。何とて物をば申さぬ
ぞ。

姫「さやうに御叱り候は。かくさず申し候ふべし。
いたはしや母御前。今を限りの御時。此鏡を和御

前に取らするなり。母が姿を残す形見なり。恋しき時は見るべしと。おほせ候ひし程に。ある時此鏡を見れば。母の面立うつりしより。猶若やぎて見え給へば。

地

「さてはなからん跡までも。く。添ひ添はれんと面影を。残させ給ひける。母御の慈悲ぞ有難き。不審に思し召されば。見せ参らせん鏡山。立ち寄り給へ父御前。く。

ワキ詞

「是は不思議なる事を申す物かな。空しくなりし母の何しに鏡にうつりて見え候ふべき。但し屹度思ひ出だしたる事の候。漢の武帝の后李夫人なくならせ給ひて後。帝後の御別れを悲しみ給ひ。御姿を甘泉殿の壁に写し。明暮叡覧有りしかども。もとより絵に書ける形なれば。物いはず笑はず。なか／＼愁ひぞ増さると悲しみ給ふ。ある時仙人の告げていはく。まこと後の御姿を。叡覧有りたく

思し召さば。月の夜の隈なからんに。反魂香を焚き給へと有りしかば。教へにまかせて月の夜の隈なきに。反魂香を焚き給へば。煙の内に後の御姿まみえ給ひしためしもあり。又我朝の聖武皇帝の后。光明皇后なくならせ給ひて後。是も後の御別れを悲しみ給ひ。梵天に祈誓し給へば。閻王憐れみ給ひ。玉の輿に乗せ奉り。二たび娑婆に送り給ひしためしもあり。さりながらそれは上代の事。

是は末世の今の世に。さやうの事の有るべきとは存じ候はねども。かれが母も姫に名残を深く惜しみ候ひし程に。もし又さやうの事もや候ふらん。立ち寄りて鏡を見ばやと存じ候。や。さればこそ筋なき事を申し候。やあ如何に姫。此鏡に母が影のうつる事はなきぞとよ。何とて筋なき事をば申すぞ。

姫「恨めしやあれ程母のましますを。思ひ隔て、山鳥

の。おろかに見させ給ふかと。鏡の前に泣き居たり。実にや別れての。涙もいまだ干ぬ袖に。異妻を重ね給ひぬれば。其恨みにや恋衣の。見えじとおぼしめさるらめ。よし父にこそ疎くとも。

地「我には見えよ垂乳根の。親の飼ふ蚕の眉墨の。いと細し誰をかも。恋ひ瘦せ顔ぞ見ても泣く。涙がすみの悲しやな。底より曇り増鏡。あれこそ母よ御覧ぜよと。我影に指をさす。実にあはれなりさ

ればこそ。幼き身の心なれ。く。

ワキ詞

「言語道断の事。我影の鏡に移るを見て。母が影にて有る由を申し候ふは如何に。総じて此松の山家と申すは。無仏世界の所にて。女なれどもはごねをつけず。色を飾る事もなければ。まして鏡など、申す物をも知らず候ひしを。某一年都に上りし時。鏡を一面買ひとりて彼が母に取らせて候へば。世になき事に悦び候ひしが。今はの時姫を近づけ。我

を恋しく思はん時は。此鏡を見よと申し、程に。
我影の移るを見て母と思ひ歎く事の不便さは候。
いや／＼所詮鏡の謂を語つて歎きをとゞめばやと思
ひ候。やあ如何に姫。総じて鏡といふ物には。何
にてもあれ向ふ物の影の移るぞとよ。是々見候へ。
父が立ちよれば父が影。扇を移せば扇の影。こゝ
を以て思ひ知れ。

姫

「実に／＼父のおほせの如く。今こそかくとも三吉

野の。

ワキ

「岸の山吹風吹けば。

姫

「底なる影も散れば散り。

ワキ

「靡けば靡く歎冬の。

姫

「影をあやまつ。

ワキ

「はかなさよ。

地

「子ながらも。是ほど母に似けるよと。わが影な
がらなつかしや。

ワキ 「父は涙にかきくれてや。

地 「我こそは曇らすれ。面目なの鏡や。

母 「子は親に。似るなる物と思はれて。恋しき時は鏡をぞ見る。

地クリ 「往時渺茫としてすべて夢に似たり。旧友零落してなかば泉に帰す。

母サシ 「之を水といはんとすれば。

地 「即ち漢女が粉を添ふる鏡清瑩たり。

母 「花といはんとすれば蜀人文を洗ふ錦。

地 「我とても。娑婆の故郷に立ち帰らば。錦の袴君が為め。

母 「昔を語り申すべし。

地 「夢おどろかし給ふなよ。

クセ 「唐に陳氏とて。賢女の聞え有りけるが。世のならひ思はずも。夫遠行の子細あり。是や限りと思ひけん。形見の鏡割りて猶。光りぞ残る三日月の。

宵に待ち明けて恨み。文も絶え主も来ず。憂き年月を故郷の。軒端の荻の秋更けて。風の便りの伝聞けば。夫は其国の主となり。あらぬ妹背の川波の。立ち帰るべきやうもなし。さては逢ふ事も形見の鏡我ひとり。涙ながらに影見れば。半月の山の端に。打ち傾いて泣くならで。せんかたもなき折節に。

母「いづくよりとも知らざりし。

地「鵲ひとつ飛び来り。陳氏が眉に羽を休め。飛びめぐり飛びさがり。舞ふよと見しが不思議やな。有りし鏡の割となり。もとの如くになりにつけり。満月の山を出で。碧天を照らす如くなり。是や賢女の。名を磨く鏡なるべし。

シテ「如何に罪人何とて遅きぞ。

詞「片時の暇といひつるに。冥官怒りをなし給へば。俱生神急ぎ苦患を見せよとの仰せを蒙り。瞋恚の

燃えたつ熱鉄のしもとを振り上げて。

地

「空蟬の。く。骸は娑婆にや留まるらん。魂は冥途にもぬけの衣の。玻璃の鏡の潔き。面前に引つさげ引き向け。あれ見よ娑婆にての罪科よ。

シテ

「こは如何に不思議やな。

地

「こは如何に不思議やな。孝子の弔ふ功力によつて。鏡の影をよくく見れば。頭に玉座膚は金色。両臂をかゝみて手を合はすれば。さながら菩薩の座

像かと。御空に花降り虚空に音楽。聞かず見もせ

ぬ冥途の奇特。すはや地獄に帰るぞとて。大地をかつぱと踏み鳴らし。大地をかつぱと踏み破つて。奈落の底にぞ入りにける。